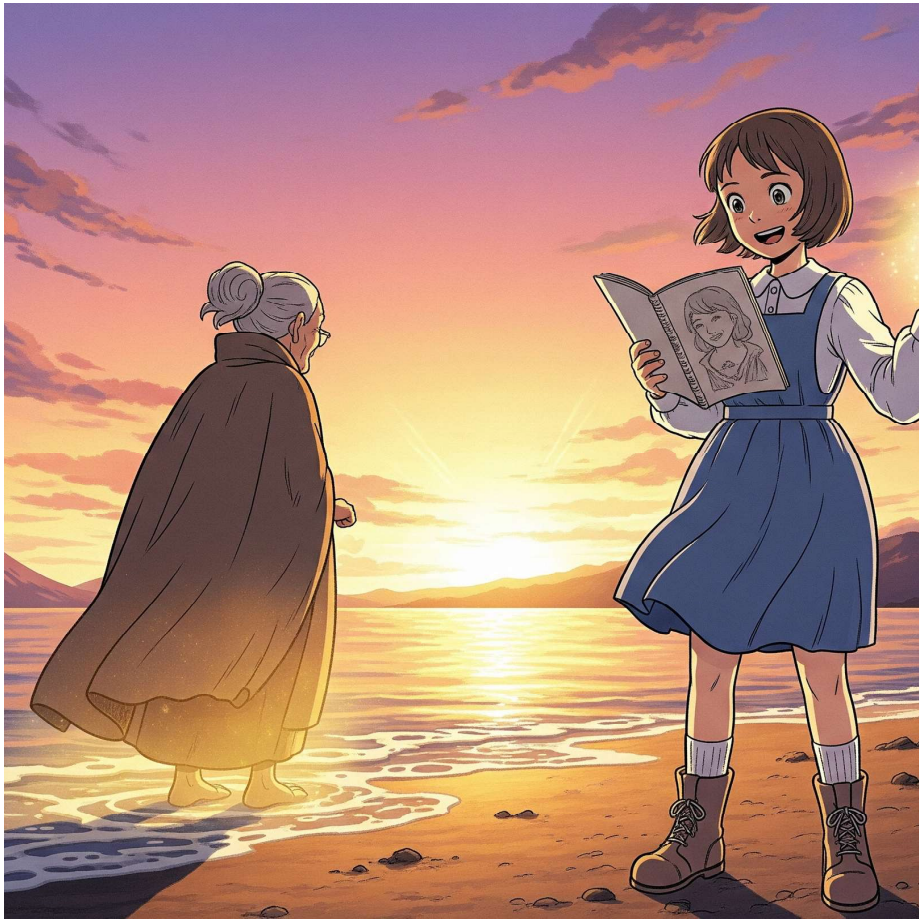
TECH PARK

作：あかね

むかしむかし、とは言わないけれど、今からそう遠くない昔のお話です。鹿児島県の、錦江町という自然豊かな町に、つばさという12歳の女の子が暮らしていました。錦江町は、山も川も、あたりまえのように生きていました。そんな町で、つばさはいつもスケッチブックと色鉛筆を肌身離さず持っていました。つばさは、この目に映るすべての神秘を絵にしたいと願っていましたが、描く絵はいつもどこか物足りなく、命が感じられませんでした。

ある日の午後、つばさは地面に落ちている不思議な光を見つけました。それは、まるで小さな虹が固まったかのように輝く、不思議な石でした。つばさがその石で絵を描いてみると、信じられないことが起こりました。石から放たれる光が線となり、描かれた森の緑や川の青が、生きているかのように表現されたのです。特別な石の絵筆を手に入れたつばさは、その力を試そうと、錦江湾の海岸へと向かいました。

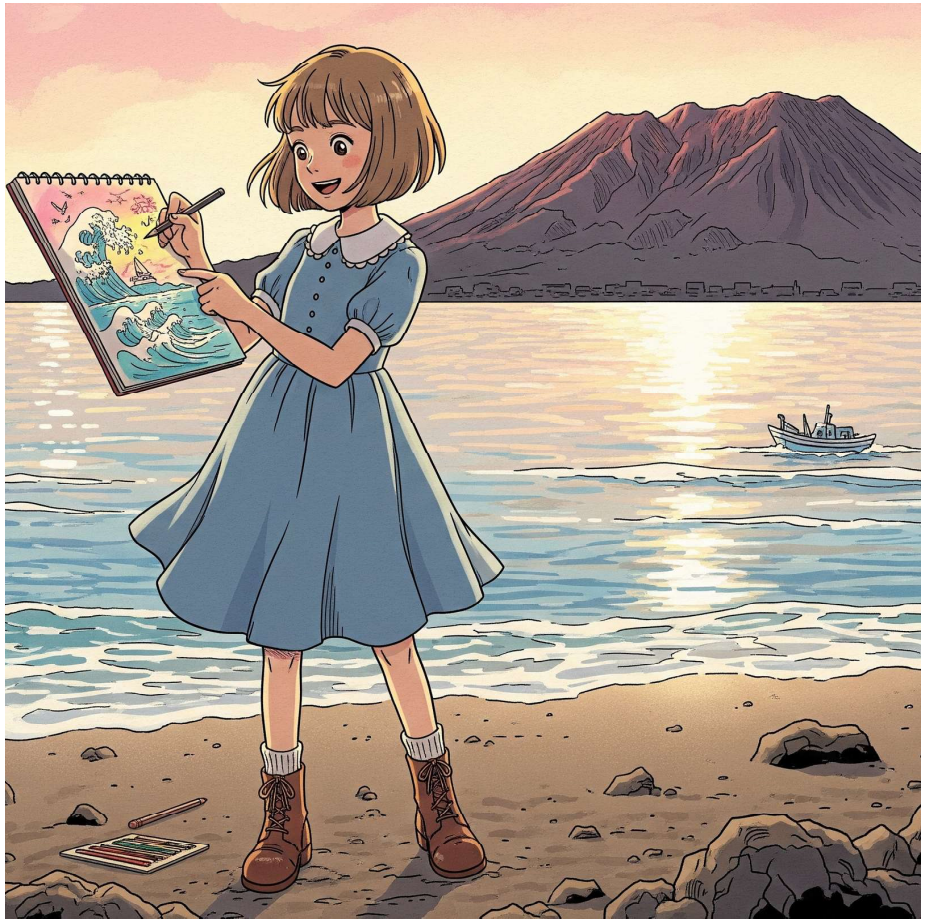
日に染まる錦江湾と、その向こうにそびえる桜島の絵を描きました。描き終えると、不思議なおばあさんが現れました。おばあさんは、自分もかつてこの石を拾ったこと、そして「描き手の心と町の命が結びついたときにしか力を発揮しない」という大切なことを教えてくれました。



おばあさんは、つばさにこの石を大切にしてほしいと告げると、夕日の光に包まれて消えていきました。特別な石の絵筆のおかげで、つばさの絵は別人のように生き生きとしました。人から褒められるたびに心が弾み、もっとすごい絵を描きたいという気持ちがふくらんでいきました。

ある日、深い森で絵を描こうとしたとき、石が光らなくなりました。つばさは焦って考えました。そして、自分が人から褒められたいという気持ちばかりで、この町の自然と向き合うことを忘れていたことに気づきました。つばさは過去に描いた絵を振り返りました。

石を拾う前の、下手くそだったけれど、純粋な気持ちで描いた絵です。その絵を胸に抱きしめ、「ちゃんと、あなたの命を描きたかったんだ」と涙を流すと、石は再びまばそして、再び錦江湾へ向かい、もう一度、心から愛するこの町の風景を描きました。今度は誰かに褒められるためではなく、ただこの町の命を表現したいという思いで描きました。



光を取り戻した石を、つばさは大切にポケットにしまいました。そして、再び錦江湾へ向かい、もう一度、心から愛するこの町の風景を描きました。今度は誰かに褒められるためではなく、ただこの町の命を表現したいという思いで描きました。
それからのつばさは、錦江町のいろんな自然を絵に描き続け、そこには必ず動物たちが描かれていました。

つばさの絵は、町の人々の心を温め、たくさんの人を笑顔にしました。
時が経ち、つばさは長年の夢だった、錦江町の絵だけを集めた個展を開きました。会場には、つばさが心から愛し、描き続けたたくさんの絵が飾られました。その絵は、この町の美しい自然と命を、たくさんの人々に伝えていくことでしょう。そして、つばさの絵画の旅は、この先もずっと続いていくのです。